

「スネアドラムは鳴る」

—初稿—

2026/5/26

〈人物表〉

三沢 圭史 みさわ けいし

(16)

丸バツ高校吹奏楽部二年生、スネアドラム担当

吉山 直樹 よしやま なおき

(16)

丸バツ高校吹奏楽部二年生、バスドラム担当

葛西 博 かせい ひろし

(49)

丸バツ高校吹奏楽部の顧問

木村 義 きむら よし

(16)

丸バツ高校吹奏楽部二年生、フルート担当

1. 丸バツ高校・音楽室前の廊下（夕）

誰もいない廊下。さっきまで練習していたのか、譜面台と学校椅子が幾つか残されている。音楽室からラヴェルの「ボレロ」の演奏が聞こえる。曲はまだ序盤の、オーボエの独奏が入るあたり。スネアドラムの音、一定のリズムを刻んでいる。

2. 丸バツ高校・音楽室（夕）

タタタッと懸命にスネアドラムを叩き続ける両手。音楽室には、指揮を取る顧問の葛西宏（49）と、葛西を囲って演奏する三十人くらいの部員ら。黒板には「定期演奏会まであと30日」の字。スネアドラムの両手、一瞬もたつく。

葛西、瞑っていた目をパツと開く。立て直そうとするもリズムは次第に乱れてきて……葛西、両手のひらを突き出し、「やめ」の合図。皆、演奏をやめ、それとなく一点に視線を集める。

視線の先には、スネアドラムの肩掛けホルダーを装着した三沢圭史（16）。

バツの悪い顔の圭史、バツと頭を下げ、

圭史 「……すみません！」

ギュッとスティックを握る圭史の腕。テーピングや絆創膏が巻かれている。

と、チャイムの音。

葛西 「……今日はこの辺にしとこうか」

全員、すぐさま立ち上がって、

全員 「ありがとうございました！！」

皆、片付けをしながら圭史に「ドンマイ」「ファイト」など声をかける。圭史、苦笑い。

ふと、バスドラムを片付けている吉山直樹（16）と目が合う。何を考えているか分からない無表情。

圭史、パツと目を逸らす。

義の声 「圭ちゃん、今日も居残り練やってく？」

と、フルート片手に笑顔の木村義（16）。

圭史 「……いや」
と、目を伏せる。

3. 丸バツ高校・職員室（夜）

葛西、デスクで帰り支度の最中。
圭史、その傍に立っている。二人の他は誰もいない。
葛西 「……じゃあ、誰がスネアやんの？」
圭史 「……例えば、吉山、とか」
葛西 「……で、圭史が代わりにバスドラ？」
圭史 「……はい」
と、ダメ元で葛西の顔を伺う。

葛西 「……いいよ」
圭史、あっと口を開ける。

葛西 「吉山がいいなら、いいよ」
圭史 「……えっと」

葛西 「次の合奏までに決めといてくれる？」
圭史 「……はい」

4. 丸バツ高校・下駄箱（夜）

圭史、帰ろうとするも、誰か待っている。
義 「よっ」

5. コンビニの入口（夜）

二人、棒アイスの包み片手に出てくる。

6. 帰り道（夜）

二人、アイスを食べながら歩いている。

義 「せっかく選ばれたんだからやればいいのに」

圭史 「できないことはやれないの」

義 「ボレロのスネアだよ？」

圭史 「ボレロのスネアだからだよ。迷惑、掛けらんないだろ」

義 「……じゃあ、俺がやる」

圭史 「え？」

義、棒アイススティックに見立て、リズムを刻む。

義 「タンタタタ、タンタタタ、タンタン……」

圭史 「お前フルートな」

義 「この2小節を169回叩くんだけ。そりや人間やめな
きやだよな。吉山みたいなロボットじゃねえと」

と、諦めてアイスを口にする。

圭史 「……俺だって、悔しいよ」

義 「え？」

圭史 「吉山ならさ、やれるよ」

義 「……ふーん？」

圭史 「……なんだよ」

義 「いや、悔しい奴がやることかなと思って」

7. 丸バツ高校・音楽室（朝）

個人練習の最中。様々な楽器の音が入り乱れている。

その一角で吉山、淡々とバスドラムを叩いている。

圭史、意を決して、吉山に歩み寄る。

吉山、ゆっくりと圭史を見上げる。

圭史 「吉山、ちょっといい？」

義、その様子を見ている。

8. 丸バツ高校・階段の踊り場（朝）

圭史 「それで、吉山ならスネア、できるかなって」

と、吉山の表情を伺う。

対する吉山、無表情でじっと圭史を見ている。

圭史 「急な話で悪いとは思ってる。先生にはさ——」

吉山 「三沢君。それ、どういふつもりで言ってるの？」

と、淡泊な感じで喋り出す。

圭史 「もちろん、せっかく先生に選んでもらったのに勿体無い
よな。けどもう来月だし吉山がやった方が——」

吉山 「いや違うな」

と、考え始める。

吉山 「多分、間違ってる」

圭史 「何が？」

吉山 「三沢君の考え。全体最適のために自己犠牲が必要みたい

な考えがそもそも間違ってるんだよ」

圭史 「えっと……」

吉山 「あれだ。神の見えざる手だ」

圭史 「え？」

吉山 「公共の授業、聞いている？」

圭史 「いや」

吉山 「全員が自分の利益を追求することが結果として最適な社会に繋がるっていう経済理論」

圭史 「……はあ？」

吉山 「要するに、僕ら演奏家もそうなんだよ。エゴでいいんだ」

9. 丸バツ高校・音楽室（朝）

個人練習中の部員ら。

吉山の声 「ハーモニーを作るのは調和じゃない」

義、フルートを握り、念入りに運指を確認。

吉山の声 「この中で誰よりも目立ちたいという個人のエゴだ」

その他、クラリネットに、オーボエ、トロンボーンなど黙々と練習をしている。

黒板の「定期演奏会まであと30日」の字、「あと29日」に書き換えられる。

吉山の声 「演奏家はそのエゴをただステージでぶつけるだけ」

音楽室の一角で管楽器チームの数名を前に指揮する、葛西の指先。

吉山の声 「あとは神の見えざる手がハーモニーへと導いてくれる」
管楽器チームの面々、穏やかな表情で演奏。

吉山の声 「そんな楽しいことしか、演奏家は考えなくていいんだ」
管楽器チームの面々、小休止。笑顔で労い合う。

10. 丸バツ高校・階段の踊り場（朝）

吉山 「三沢君もそれが好きで居残り練してんだと思ってたけど」

吉山、テーピングで覆われた圭史の腕を見る。

圭史、ぎゅっと拳を握る。

圭史 「……じゃあ、どうすればいい」

吉山、圭史の顔を見る。

圭史、真っ直ぐ吉山を見ている。
圭史 「体力をセーブしなきゃと思うと、途中で力が抜けてリズム遅くなっちゃうんだけど、吉山なら、どうする？」
吉山、口元が綻ぶ。

11. 丸バツ高校・音楽室（朝）

静寂。合奏の形態になっている。
葛西、圭史がスネアドラムを持っているのを確認。
圭史、葛西を見て、指揮を待っている。
葛西、バツと手を振り上げる。
圭史、スネアドラムを叩き始める。
先ほどより力強く、一定のリズムを刻み始める。
義、フルートの旋律をスネアドラムの音に乗せる。
葛西、指揮しながら口元を綻ばせる。
葛西、両手のひらを突き出し、「やめ」の合図。
皆、演奏をやめる。

葛西 「圭史、走り過ぎ」
と、圭史を見る。

葛西 「音もデカすぎ。ピアノシモなんだから。スネアしか聞こえないかと思ったよ」

圭史 「はい、すいません」
圭史、真っ直ぐ葛西を見る。

葛西、思わず口角が上がる。
葛西 「じゃあ、もう一回やろっか」
圭史はじめ部員ら、力強く返事。

全員 「はい……」
葛西、圭史を見ると吉山から熱心にアドバイスを聞いている。
義、その様子を見て、笑顔。

12. 丸バツ高校・廊下（朝）

誰もいない廊下。ボレロが聞こえる。
スネアドラムの音、一定のリズムを刻んでいる。

（終わり）